

# 「日本のことば遊び」

群馬県立女子大学 北川 和 秀

## 1、導入1（数え歌）

・お手玉歌

- 一番はじめが一宮
- 三また讃岐の金毘羅さん
- 五つ出雲の神社
- 七つ成田の不動様
- 九つ高野の弘法様
- 二また日光東照宮
- 四また信濃の善光寺
- 六つ村々鎮守様
- 八つ八幡の八幡宮
- 十で東京浅草寺

\*別バージョン

- 一番はじめは一の宮
- 三は佐倉の宗五郎
- 五は出雲の神社
- 七つ成田の不動様
- 九つ高野の弘法様
- 二は日光の東照宮
- 四はまた信濃の善光寺
- 六つは村々鎮守様
- 八つ八幡の八幡宮
- 十は東京招魂社

\*このあとに、

これほど心願掛けたのに 浪子の病は治らない ごとごとごとなる汽車は  
 武雄と浪子の別れ汽車 二度と逢えない汽車の窓 鳴いて血を吐く不如帰  
 と続く（これにも多くのバージョンあり）ものもある。

・京都の東西の通りの数え歌

- まるたけえべすにおしおいけ 丸太町・竹屋町・夷川・二条・押小路・御池
- あねさんろつかくたこにしき 姉小路・三条・六角・蛸薬師・錦
- しあやぶつたかまつまんごじよう 四条・綾小路・仏光寺・高辻・松原・万寿寺・五条
- せつたちやらちやらうおのたな 雪駄・（鍵屋）・魚の棚
- ろくじようさんてつとおりすぎ 六条・三哲
- ひつちようこえればはつくじよう 七条・八条・九条
- じゅうじようとうじでとどめさす 十条・東寺

## 2、導入2（尻取り歌）

・いろはに金平糖、金平糖は甘い、甘いはお砂糖、お砂糖は白い、白いはうさぎ、うさぎは跳ねる、跳ねるは蚤、蚤は黄色い、黄色いはバナナ、バナナは高い、高いは屋上、屋上は怖い、怖いはおぼけ、おぼけは消える、消えるは電気、電気は光る、光るはおヤジの禿頭

\*別バージョン1

・いろはに金平糖、金平糖は甘い、甘いはお砂糖、お砂糖は白い、白いはうさぎ、うさぎは跳ねる、跳ねるは蛙、蛙は青い、青いは葉っぱ、葉っぱは揺れる、揺れるは地震、地震は怖い、怖いはおぼけ、おぼけは消える、消えるは電気、電気は光る、光るはおヤジの禿頭

\*別バージョン2（古そう。すみません。ちよつと汚い）

・いろはに金米糖、金米糖は甘い、甘いは砂糖、砂糖は白い、白いはうさぎ、うさぎは跳ねる、跳ねるは蚤、蚤は赤い、赤いはホウヅキ、ホウヅキは鳴るよ、鳴るのはおなら、おならはくさい、くさいはうんこ、うんこは黄色い、黄色いはバナナ、バナナは高い、高いは十二階

※「十二階」は、浅草公園にあった凌雲閣の俗称。展望台兼レストランで、明治三年（一八九〇）完成。東京一の高さを誇る建物として連日見物客でにぎわった。大正一二年（一九二三）の関東大震災で、八階部分から折れた。

## 3、万葉集のことば遊び・文字遊び

- ① たらちねの母が飼ふ蚕の繭隠りいぶ（馬声 蜂音）せくもあるか妹に逢はずして（二二・二九九一）
- ② ……み山には 射目立て渡し 朝狩に 十六履み起し 夕狩に 鳥踏み立て…（六・九二六）
- ③ 若草の新手枕を枕き初めて夜をや隔てむ二八十一あらなくに（一一・二五四二）
- ④ ……わが着たる 衣は穢れぬ 見るごとに 恋はまされど 色に山上復有山ば 人知りぬべみ…（九・一七八七）
- ⑤ 海津路乃 名木名六時毛 渡七六 加九多都波二 船出可為八（九・一七八一）
- ⑥ 言云者 三々二田八醉四 小九毛 心中二 我念羽奈九二（一一・二五八一）

⑦百済野乃 芽古枝尔 待春跡 居之鶯 鳴ル鷄鵲鳴  
百済野の萩の古枝に春待つと居りし鶯鳴きにけむかも (八・一四三一)

⑧淑人乃 良跡吉見而 好常言師 芳野吉見与 良人四来三  
よき人のよしとよく見てよしと言ひし芳野よく見よき人よく見 (一・二七)

⑨来むといふも来ぬ時あるを来じといふを来むとは待たじ来じといふものを (四・五二七)

⑩ 霍公鳥を詠む二首  
霍公鳥今来鳴き始む 菖蒲 藪くまでに離るる日あらめや 毛能波三箇の辞を闕く (一九・四一七五)

わが門ゆ鳴き過ぎ渡る霍公鳥いや懐かしく聞けど飽き足らず 毛能波氏乎六箇の辞を闕く (一九・四一七六)

尼の、頭句を作り、大伴宿祢家持の、尼に誂へらえて末句を續ぎて和ふる歌一首  
⑪佐保川の水を塞き上げて植ゑし田を尼作る 刈る早飯は独りなるべし 家持續ぐ (八・一六三五)

⑫ 鑛子に湯沸かせ子ども櫛津の檜橋より来む狐に浴むさむ  
さしなべに、湯を沸かせよ、人々よ。櫛津の檜橋を渡つて、コンコンと鳴いて来る狐に浴びせてやろう

右の一首は、伝へて云はく、一時に 衆 集ひて宴飲しき。時に夜漏三更にして、狐の声聞ゆ。爾乃衆諸興麻呂を誘ひて曰はく、この饌具、雑器、狐の声、川、橋等の物に開けて、但に歌を作れといへれば、声に應へてこの歌を作りきといふ。 (一六・三八二四)

4、竹取物語、土左日記のしやれ

①……駿河の国にあなる山の頂にもてつくべきよし仰せ給ふ。……御文、不死の薬の壺ならべて、火をつけて燃やすべきよし仰せ給ふ。そのよしうけたまはりて、つはものどもあまた具して山へ登りけるよりなん、その山をふじの山とは名づけける。その煙いまだ雲のなかへたち上るとぞ言ひ伝へたる。 (竹取・末尾)

②藤原のときざね、ふなぢなれど、むまのはなむけす。 (土左・一二月二二日)

③かみなかしも、酔ひあきて、いとあやしく、しほうみのほとりにて、あざれあへり。 (土左・一二月二二日)

④ありとある上下、わらはまで酔ひ痴れて、一文字をだにしらぬ者しが、足は十文字に踏みてぞあそぶ。 (土左・一二月二四日)

5、懸詞(掛詞)

・風ふけば沖つしら浪たつた山夜半にや君がひとり越ゆらむ (古今集九九四)  
波が立つ 龍田山(地名)

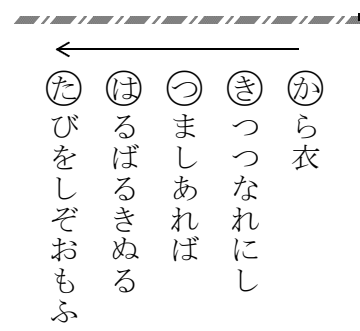
6、物名歌

・いさゝめに時待つ間にぞ日は経ぬる心ばせをば人に見えつゝ (古今集四五四)  
(かりそめにその時を待っているそのあいだに、日は経ってしまった。わたくしの気持をあなたの方にたびたび見えるようにしていながらも。) 笹、松、枇杷、芭蕉葉をよみこむ

7、折句

①むかし、をとこありけり。そのをとこ、身をえうなき物に思ひなして、京にはあらじ、あづまの方に住むべき国求めにとて行きけり。もとより友とする人ひとりふたりしていきけり。道知れる人もなくて、まどひいきけり。三河の国、八橋といふ所にいたりぬ。そこを八橋といひけるは、水ゆく河の蜘蛛手なれば、橋を八つわたせるによりてなむ八橋といひける。その沢のほとりの木の蔭に下りみて、乾飯食ひけり。その沢にかきつばたいとおもしろく咲きたり。それを 見て、ある人のいはく、「かきつばたといふ五文字を句の上にするて、旅の心をよめ」といひければ、よめる。

から衣きつゝなれにしつましあれば  
はるばるきぬる旅をしぞ思ふ  
とよめりければ、皆人、乾飯のうへに涙おとしてほとびにけり。 (伊勢物語 第九段)



②言の葉も常盤なるをば頼まなむ松を見よかし経ては散るやは(小野小町)  
言葉も不変であるのを頼りにして欲しい。松をご覧なさい。時が経っても散つたりしません。  
言の葉は常懐かしき花折るとなべての人に知らすなよゆめ(応えた人の歌)  
あなたの言葉はいつも懐かしい花を折るようだと、他の人達には決して知らせないでくださいな。  
『新撰和歌髓脳』(平安時代の歌論)に見える)

②このはは  
とこなつかしき  
はなをと  
なべてのひとに  
しらすなよゆめ

①このはも  
ときはなるをば  
たのまなむ  
つをみよかし  
へてはちるやは

\*小町は「琴たまへ（琴を貸してください）」と頼んだのに、相手は「琴は無し」と断っている。

③あくびがでるわ  
いやげがさすわ  
しにたいくらい  
てんでたいくつ  
まぬけなあなた  
すべってころべ

（谷川俊太郎の作品）

\*けなし言葉の羅列であり、単純に読めば女性からの「さようなら」のようであるが、各行の最初の字を拾うと「あいしてます」ということばが浮かび上がる。

8、沓冠くつかんむりの歌

・夜も涼し寝覚めの仮庵かりほたまくら手枕たままくらも真袖まそでも秋に隔てなき風（兼好）  
夜も涼しい。目が覚めたこの仮の廬では、腕枕も衣の袖も変わらない秋風が吹いて行く。

・夜も憂しねたく我が背子果ては来ずなほざりにだにしばし訪とひませ（頓阿）  
夜もつらい。憎たらしくもあなたはついに来ない。たとえかりそめの気持ちでも良いから、しばらく訪ねてきてください。

『続草庵集』（南北朝時代の歌人、頓阿の歌集）に見える兼好との贈答歌）

よもすずし  
ねざめのかりほ  
たまくらも  
まそもあきに  
へだてなきかぜ

よるもうし  
ねたくわがせこ  
はてはこず  
なほざりにだに  
しばしとひませ

\*兼好は「米よねたまへ、銭も欲し」と頓阿に無心し、頓阿は「米はなし、銭少し」と返している。句頭の連続と、句末の連続とに意味を持たせている歌を「沓冠くつかんむりの歌」という。

9、「いろは歌」の類

①あめつち

・あめつちほしそらやまかはみねたにくもきりむろこけひといぬうへすゑゆわさるおふせよえのえをなれるて（四八字）

・天地星空山川峰谷雲霧室苔人犬上末硫黄猿生ふせよ榎の枝を慣れ居て

\*「えのえ」と「え」が重複しているのは、平安初期にはア行のエとヤ行のエとの間に音韻の別があったから。「榎」のエはア行、「枝」のエはヤ行。

\*「あめつち」で始まるのは、『千字文』が「天地玄黄」で始まるのに倣ったものと考えられている。

②たゐに

・たゐにいでなつむわれをぞきみめすとあさりおひゆくやましろのうちゑへるこらもはほせよえふねかけぬ（四七字）

・田居たみいに出いで、菜摘なつむ我をぞ君召すと、漁あさり追ひ行く山城のうち酔よへる子等、藻葉干せよ、得船えふね繫かけぬ

③いろは

・いろはにほへとちりぬるをわかよたれそつねならむうのおくやまけふこえてあさきゆめみしゑひもせす（四七字）

・色は匂へど 散りぬるを 我が世たれぞ 常ならむ 有為の奥山 今日越えて 浅き夢見じ 酔ひもせず

\*「いろは歌」の全文は承暦三年（一〇七九）の『金光明最勝王經音義』に万葉仮名で書かれているのが現存最古

④とりなくこゑす

・とりなくこゑすゆめさませみよあけわたるひんがしをそらいろはえておきつべにほふねむれぬもやのうち（四八字）「ん」を含む

・鳥啼なく声す、夢覚さませ、見よ明け渡る、東ひんがしを、空色は榮えて沖つ辺に、帆船ほふねむ群れぬ、霏ものうち

\*明治三十六年に、『万朝報』（黒岩涙香が主宰する新聞）で募集し、その第一位になったもの。埼玉県埼玉県の坂本百次郎氏作。

- a 新聞紙（しんぶんし）、八百屋（やおや）、トマト  
竹屋が焼けた（たけやがやけた）、磨かぬ鏡（みがかぬかがみ）  
ダンスが済んだ（だんすがすんだ）、私負けましたわ（わたしまけましたわ）  
世の中ね、顔かお金かなのよ（よのなかね、かおかおかねかなのよ）
- b 手袋（てぶくろ）↓六撲て（ろくぷて）  
わたしカスミ草（わたしかすみそう）↓嘘、見透かしたわ（うそみすかしたわ）  
気付け！、細部に（きづけさいぶに）↓にぶい酒好き（にぶいさけずき）
- c 山本山、日曜日、水道水、中継中、馬車馬、大阪大、三笑亭笑三、三遊亭遊三
- d 赤坂（AKASAKA）

※古典的回文

①むら草に草の名はもし備はらばなぞしも花の咲くに咲くらむ

（『奥義抄』「草花を詠む古歌」）

\*『奥義抄』は平安後期の歌論書。

②長き夜の十（あるいは遠か）の眠りの皆目覚め波乗り船の音の良きかな  
（なかきよのおのねふりのみなめさめなみのりふねのおとのよきかな）

\*江戸時代に、よい初夢を見るように枕の下に入れた宝船の絵に書いてあった歌。  
この歌は中国で万暦二十年（一五九二）刊行の『日本風土記』にも見える。



『またたび浴びたタマ』（村上春樹・文、友沢ミミヨ・画。文藝春秋）



浦和で蒔いた、ははは、と母は大麻で笑う

・菜もなき膳にあはれは知られけり鳴焼き茄子の秋の夕暮れ（唐衣橘洲）  
\*ころなき身にも哀はしられけりしぎたつ沢の秋の夕暮（新古今集三六二）

・ほととぎす鳴きつるあとにあきれたる後徳大寺のありあけのかほ（四方赤良）  
\*ほととぎす鳴きつる方をながむればただ有明の月ぞ残れる（千載集一六一）

12、なぞ、無理問答など

・上は大水、下は大火事、何だ？（なぞなぞ）

・ゆがんだ松とかけて何と解く 郵便屋さんと解く その心は？（三段なぞ）

・一枚でも煎餅とはこれ如何に 一個でも饅頭と言うが如し

・一羽でも鶏とはこれ如何に 一羽でも千鳥と言うが如し（無理問答）

・下戸にご飯（猫に小判）（地口）

・恐れ入谷の鬼子母神、その手は桑名の焼蛤、おっとガッテン承知の助、  
来たか長さん待ってたほい、結構毛だらけ猫灰だらけ（無駄口）

13、早口ことば

・生麦生米生卵（namamugi namagome namatamago）  
・バスガス爆発（basugasu bakuhatsu）

14、文字遊び

・吹からに秋の草木のしほるればむべ山風をあらしといふらむ（古今集二四九）  
（吹くとともに秋の草木がしおれるので、なるほど山風を「あらし」と言うのだから）

・戀（恋）……いと（糸）し、いと（糸）しと言う心

・櫻（桜）……二階（貝貝）の女が気（木）に掛かる

・八十八歳を米寿、七十七歳を喜寿（喜の字の崩し字から）、九十歳を卒寿（卒の字の崩し字から）、九十九歳を白寿（百に一画足りない）